

た。これに類似する地質現象は四国における中央構造線にそう、和泉砂岩にみることができる。和泉砂岩は厚く粗粒物質から構成され、四国以東にも以西にもその延長が知られている。関東の成田砂岩も関東構造線(利根川構造線)と密接な関係をもつものではなからうか。内帯中央構造線は手取層群の堆積過程で、特殊現象を出現したと云える。しかし、一方、手取堆積後、内帯中央線は手取層群の構造の形成に大きい役割をもたらしした。谷戸口片麻岩塊は手取層群に衝上し谷戸口片麻岩塊の南の大納帯の手取層群は褶曲構造をなしつつ、送転している。

南北性の圧縮性地裁運動が激しく働いたため剛体化した谷戸口片麻岩塊は内帯中央線にそう側(南限)も、またその北限でも手取層群に衝上した。内帯中央構造線の南の古生層帯ではいわゆる「サンドウイツチ型」の、同線の北の飛騨片麻岩帯ではモザイク型の地質構造が模式的に発達し、前者は中龍鉱山以南によく発達し、後者は石川県の手取川、富山県の神道川流域によくみられる。内帯中央線を境に南北両帯で、手取層群の種々の現状が対立的であることは注目すべきことである。

バンジンガンクビソウ福井県にも産す

京大大学・理学部・植物学教室 村 田 源

バンジンガンクビソウ *Carpesium Hosokawae* Kitamura は初め台湾で記載された植物であるが、その後日本内地にも産することがわかつて、今日では九州、四国から中国地方近畿地方にまでその産地が明らかになつて来た。その中で一番東の記録は滋賀県鎌掛村桃水谷で瀬川喜久次氏が採集されたものであつたが、昨年夏植物分類地理学会の池の河内方面様集会の前日、宿で渡辺定路氏の多くの採集品を見せていただいている中に、遠敷郡名田庄村一ノ谷で採集された標本があつて、更に記録を一步福井県にまで進めることができた。おそらくこのあたりが本種の分布の東限ではなからうかと思われるが、更に同好者各位の御努力によつてくわしくその分布の東限をさぐつていただきたいと思つて、この誌上にこれを報告させていただくことにした。バンジンガンクビソウは保育社の原色植物図鑑上23 Plate 173(北村、村田)に図が出ているので、参照していただきたい。比較的珍しい種類で、日本内地でも台湾でも、そう普通にはない植物である。高さは40cm位から大きくなると70cm位まで伸びることもあるが、やや細く、ホソバガンクビソウに似てずつと繊細で、葉は披針形である。頭花も細く総苞は巾4-5mm位しかないのですぐ区別がつく。福井県のあたりは北から分布して来た植物と、南西の中国方面から分布して来た更に古い植物との間に、それぞれ南限になつたり北限地になつたりしているものもかなりあり、植物分布の上からなかなか興味のある地域である。例えばナタオレノキは分布の東限になつているし、ミズドクサ、ヤナギトラノオ、サワラン等は池の河内湿地がその南西限である。その他にもかなりこういったものもあると思えるので、たんねんに調査を進めると、いろいろ面白い事実がわかつてくるのではないかと思う。